

### 特総研原田先生との懇談報告

4月16日(木)に行きまして参りました視察の報告をいたします。

#### 【特総研 原田先生の懇談より】

聾教育に対する熱い想いを聞いてきました。札幌ろう学校の改築担当だった先生です。まずは、これを機会に職員が一丸となって、校舎改築に取り組むこと。全員が常に関心を持つような体制づくり。そしてでかい夢を持つこと。少しずつ縮小は必要かもしれないが、何があればいいのか。イメージを集めて共有していく。無理なこともあるけれどまずは、どんどん希望は言うこと。

#### (1) これからの聾学校のあり方について

- ・基本は聾学校として「準ずる教育」に従った教育課程編成を確立すること。他の障害と一緒に教育課程を融合して、曖昧にしない。他の障害を受け止め、受け入れることも大事だが、やるからには、条件を整備すること。教育的に何が大切なのかを考えること。
- ・しかし、単に他障害を排除するのではなく、共存できる場所はどこかを考える。(聾学校が嫌われないように)

#### (2) 新しい校舎を建てるのに大切な考え方

- ・100年と言わず1000年持つ学校を作ろう。子どもたちにとって何が1番幸せな学校なのか。愛着を持ち、最高のシステムを考える。次世代を読んで考えることが大事。みんなの共通意識を高めていくことが大切。
- ・先生方でゆっくり語り合うことが大事。意見の共有が必要。フリーの意見を出し合う。今の空間でどうなのか、使い勝手など出し合い、それをアレンジしていく。
- ・卒業生の要望も良く聞く。皆で納得してより良い学校に改築していく。生徒達にとっては、20年近く通う学校である。
- ・学校以外の良い建物もどんどん見る。

#### (3) 聾学校、聾教育について理解してもらうために

- ・聾教育について知らない、建築部門の人や県職員、地域の人達に理解してもらうことがとても重要でそのためには、地域にもよく話す。(説明会のような堅苦しいものでなく)
- ・学校公開なども増やす。
- ・校内研修に必ず講師として医療や福祉関係者をお招きする。
- ・DVDの作成、配布など、色々考えることをやってみる。
- ・職員の理解啓蒙の意識が重要である。

#### (4) 聾学校の専門性を活かした施設・設備、設計の際の配慮

- ・本当は、マイクよりも肉声を届けた方がよいので、壁や床の吸音の工夫を。
- ・音響は最高に、最初に。
- ・音・音声・採光に配慮することが最低条件。学校は建築法で定められている音響測定によって工事をするが、聾学校は違うことを理解してもらう。(C特性での音響測定が重要)
- ・情報保障も。基準がないと県に言われたら、基準にしろくらいの勢いで。
- ・保護者を大切に。保護者の最初に来る面接室や控え室。赤ちゃんを連れてきてもゆったり話したり、泣けるような空間を。
- ・予算のこともあるが、大切な物についてはねばること。何よりも教室から考えること。先生達の想いが込められた学習環境作りを。子供がとにかく中心であることを忘れずに!
- ・聴力検査室は、ろう学校の中心なので誇れる物を。
- ・各部屋がどういう機能を持つものか、ゆっくり考えてみるのが重要。
- ・教育内容では、子供にひたむきになること。授業に悩み、それをみんなで語ったり、教え合ったりできるような集団に。先生同士も最高のコミュニケーションをする。子どもについて、指導方法について、話す中からより良い物が生まれる。職員室の机の上に何も置かず、コミュニケーション取り合えるようにするため、ロッカーや教材室の整備。教材室は教員が利用しやすい場所に。物置でなく教材が命。
- ・三輪学園との施設は分けて区切りはつけるべき。

#### (5) その他

- ・地域から「良い学校」といわれる学校を。
- ・幼、小、中、高、と分かれて考えず、学校のことはどの部のこともみんなで考える。
- ・最初から妥協案は絶対出さない!! 子どもたちにとって良くないで推すこと。
- ・教師の専門性として、「声なき声を聴く」つまり気配り、心配りのできる人でなくてはならない。そんな気配り心配りの行き届いた校舎に。

等のお話を伺いました。時間はない。でも、あせって取り返しがつかなくなっても困ります。どんな学校にするのかぜひ一緒に考えましょう。